

## 韓国人日本語学習者の誤りについての評価の研究

著者	趙 南星
号	133
発行年	1997
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/14313">http://hdl.handle.net/10097/14313</a>

CHO  
趙

NAM  
南

SUNG  
星

学位の種類      博士(文学)

学位記番号      文 第 133 号

学位授与年月日      平成10年 3 月 5 日

学位授与の要件      学位規則第 4 条第 2 項該当

学位論文題目      韓国人日本語学習者の誤りについての評価の研究

論文審査委員      (主査)

教授 大坪 一夫      教授 菊池 章夫  
教授 村上 雅孝

## 論文内容の要旨

### <第1章>

外国語学習において、誤りは、学習者がよりよい規則を習おうとすればやむをえないものである。なぜなら、誤りを犯すことは学習者の用いる学習手段の1つであるともみなすことができるからである。すなわち、学習者が目標言語の特性について自己の仮説を試す際に用いる方法の1つである。しかし、誤りが円滑なコミュニケーションを阻害することは確かである。さらに、同じ誤りでもコミュニケーションの相手(受け手)によっては、理解を阻害し、不快感を与えたり、不自然なものとして受け取られたりし、コミュニケーションを妨げる度合いに差が出てくる。それは誤りの特性、すなわち誤りの種類(語彙・文法上の誤り)や原因(母語干渉による誤りと母語干渉以外の誤り)とも関係があると考えられる。そして、学習者の母国の文化に関わる伝達内容などにも違ってくるであろう。

一方、外国語(日本語)教師は学習者の発話意欲をそがないように誤りを訂正する必要がある。誤りが起こればその重要度を判定し、重要度に応じた対応が要求される。教師が誤りの重要度を決定するときには、まず学習目標を考えなければならない。もし学習目標が絶対的な言

語の正確さの達成にあるのならば、誤りはすべて重要となり、同一尺度で評価すべきであると言える。しかし、もし学習目標がコミュニケーションな成功（success）にあるのならば、我々は違った評価の尺度を用意しなければならない。つまり学習目標が違えば、評価の尺度も変えなければならないということである。本研究では、コミュニケーションな成功が外国語教授の主要な目標の1つであるとの前提に立ち、この学習目標に合致した客観的な誤りの評価基準が必要であるとする。それは、言語学者あるいは外国語教師ではなく、メッセージの受け手の側（目標言語母語話者）の、言語的直観による判定をもとにした基準である。しかし、これまで有効な基準はまだ設けられてこなかった。特に、コミュニケーション上の効率（effect）すなわち文章内の誤りに対する理解度、不快感、自然度などを考慮に入れた誤りの重要度（error gravity）を調べる試みは、日本語教育において本格的になされているとは言い難い。これまでの研究では主に送り手の表現上の誤りのみを研究の対象としており、コミュニケーション上の受け手による分析という視点が欠けている。また、誤りの評価（error evaluation）についても、評価者の日本語母語話者は少人数の大学生と日本語教師に限定されており、日本語母語話者の多様な要因や学習者の母国の文化の理解度が評価にどのような影響を及ぼすかという点は考慮されていない。

コミュニケーション重視の授業で、その目的に合った誤りの訂正を行うためには、従来のような学習者の誤り自体の分析（誤りの種類、原因、頻度）のみではなく、本研究のコミュニケーション上の効率から見た誤りについての重要度、すなわち誤りの評価が役立つであろう。また、コース・デザインや教材作成、矯正プログラム、テスト法や教授法の開発などに応用することができる。そして、評価をもとにした誤りのランク付けの試みは、たとえば誤りを訂正する際にどれを優先するかを決定するなど、誤りの分析の実践的応用の側面に資することが大きいと考えられるため、従来の誤りの分析と、実際の言語教育とを直接結びつけるのにも役立つと思われる。

## <第2章>

本章では、誤りの評価に関する先行研究について、誤りの種類（文法、語彙の誤り）、評価の基準（理解度、不快感、自然度）、評価者（学習者の目標言語話者）の要因に関するものを中心に概観した。また、日本語教育における誤りの分析と誤りの評価の関係についても述べた。

## <第3章>

本章では、本研究で用いられる評価の材料である、韓国人日本語学習者の翻訳上の誤りの領域、原因、頻度などを学習レベル別に考察した。日本語学習者の誤りの領域は、大きく「1. 語彙論的な誤り」「2. 形態論的な誤り」「3. シンタクス・意味論的な誤り」の3つに分けられる。原因別では、母語の干渉を基準に「1. 韓国語の干渉による誤り」「2. 韓国語の干渉

以外（日本語内の問題）の誤り」の2つに分けられる。前者は学習者の母語（韓国語）の構造を反映して、無意識に直訳ストラテジーを使用したものである。後者は日本語内部の構造（類語など）そのものが困難であったり、または既に学習した日本語の規則を未知の構造に適用しようとしたために生じたものである。

一方、日本語学習者の誤りの頻度は学習レベルが低いほど、すなわち2年生、3年生、4年生の順に高い。したがって、学習の時間が多いほど、誤りの頻度は少なくなるといえる。しかし、実際には2年生と3年生、3年生と4年生でそれぞれの差は小さいことがわかった。これは韓国人日本語教師が、誤りの分析を通じて学習（翻訳）上の問題点を十分に把握し指導しているとは言えないためであろう。そして、誤りの原因別では日本語内の問題による誤りより韓国語の干渉による誤りが、領域別では語彙論的な誤りよりシンタクス・意味論的な誤りが、すべての学習レベルでほぼ同様に頻度が高い。

#### <第4章>

本章では、評価者としての日本語母語話者の要因による、日本語学習者の誤り（3章）の相対的な重要度を求めることを目的とした本研究の方法について述べた。日本語母語話者は男女691名で、年齢（10代、20代…60歳以上）及び社会的要因（職業、学歴、学習者の母語（韓国語）の学習歴、外国人との対話経験、外国人の日本語の誤文を読んだ経験、話せる外国語の有無、外国に住んだ経験など）も多様である。誤りは韓国人日本語学習者（日本語専攻者274名）が翻訳（韓国語を日本語に訳す）する際に犯した最も頻度の高いもの（84個）である。

調査の文章（84個の誤りが含まれている）の内容は「韓国のキムチ」についてで、2,501字76文となっている。調査は本研究者が依頼可能な日本人に対し直接あるいは郵送により依頼した（回収率90.1%）。誤りの評価は理解度、不快感、自然度の3つの観点から、5段階尺度で判定し、その誤りの訂正もお願いした。各種の統計的な分析にはSAS（Statistical Analysis System）を使用した。

#### <第5章>

本章では、84個の誤りの全体的な評価について考察した。

##### (1) 全体的な分析

日本語母語話者は84問全体で尺度値をほとんど4つ以上用いており、誤りの重要度に差があることを示している。そして、日本語母語話者は全84個の誤りそれぞれで自然度、不快感、理解度の順で厳しく評価している。また、評価の3つの基準の間にはそれぞれ高い相関が見られた。すなわち理解度が低いほど不快感は高く、不快感が高いほど自然度は低く、理解度が低いほど自然度も低いといえる。

## (2) 原因・領域別の分析

誤りの原因別では、いずれの基準についても日本語内の問題による誤りも、韓国語の干渉による誤りのほうが重大だと評価された。前者は正しいものと誤ったものがほとんど似た表現なので、学習者の表現意図がある程度予測できたため、寛大に評価された。後者は学習者の母語（韓国語）の構造を反映して、日本語母語話者がほとんど使わない表現に直訳したものが多く、日本語母語話者には表現意図を理解するのが難しかったためである。一方、誤りの領域別では、理解度においては形態論的な誤り及びシンタクス・意味論的な誤りより語彙論的な誤りが、不快度と自然度においてはシンタクス・意味論的な誤りより語彙論的な誤りと形態論的な誤りのほうが重視され、厳しく評価されている。したがって、いずれの基準についても、シンタクス・意味論的な誤りよりも、語彙論的な誤りのほうが重大だとされていることになる。

## (3) 日本語母語話者の要因別の分析

日本語母語話者の要因別に見た84個の誤り全体についての評価では、「韓国語の学習歴がない」「外国人の日本語の誤文を読んだ経験がない」「韓国に対する関心がない」評価者のほうが、学習者の誤りの理解が困難である。また、男性より女性、「学歴が高い」「話せる外国語がある」「外国に住んだ経験がある」評価者のほうが、学習者の誤りに不快感を持つ。そして、男性より女性、「学歴が高い」「韓国語の学習歴がある」「外国人との対話経験がある」「外国人との対話経験が多い」「外国人の日本語の誤文を読んだ経験がある」「外国人の日本語の誤文を読んだ経験が多い」「話せる外国語がある」「外国に住んだ経験がある」「韓国のキムチについての知識がある」「韓国に対する関心がある」「韓国についての知識がある」評価者のほうが、学習者の誤りをより不自然だと評定している。年齢別に見ると、不快度と自然度において低い年代は高い年代よりより、職業別では、不快度と自然度において、教育と関わりのあるグループ（教員、学生）は、教育と関わりのないグループ（主婦、家事従業者）より厳しく評価していることがわかる。

そして、日本語母語話者の要因の中で、「韓国語の学習歴の多少」「方言が話せるかどうか」「韓国語が話せるかどうか」は、すべての基準についての評定に影響を与えていないことがわかった。

## <第6章>

本章では、日本語母語話者の要因による、誤りの原因別の評価を考察した。

### (1) 性別・年齢別の分析

原因1・2のどちらの誤りにおいても、男性より女性のほうが、学習者の誤りに不快感を持ち、学習者の誤りがより不自然だと評定している。そして、年齢の差は不快度と自然度についての評定に影響を与えることがわかった。

## (2) 社会的要因別の分析

原因 1・2 のどちらの誤りにおいても、「韓国語の学習歴がない」「外国人の日本語の誤文を読んだ経験がない」評価者のほうが、学習者の誤りの理解が困難である。また、「学歴が高い」「外国人の日本語の誤文を読んだ経験が多い（原因 2 のみ）」「話せる外国語がある」「外国に住んだ経験がある」評価者のほうが、学習者の誤りに不快感を持つ。「学歴が高い」「韓国語の学習歴がある」「外国人との対話経験がある」「外国人との対話経験が多い」「外国人の日本語の誤文を読んだ経験がある」「外国人の日本語の誤文を読んだ経験が多い」「話せる外国語がある」「外国に住んだ経験がある」評価者のほうが、学習者の誤りをより不自然だと評定している。一方、職業の種類は、不快感と自然度（原因 2 のみ）についての評定に影響を与えることがわかった。

## (3) 韓国文化の理解度による分析

原因 1・2 のどちらの誤りにおいても、韓国に対する関心がないほうが、学習者の誤りの理解が困難である。そして、「韓国のキムチについての知識がある」「韓国に対する関心がある」「韓国についての知識がある」評価者のほうが、学習者の誤りをより不自然だと評定していることがわかった。

## <第 7 章>

本章では、日本語母語話者の要因による、誤りの領域別の評価について考察した。

### (1) 性別・年齢別の分析

領域 1・2・3 のいずれの誤りにおいても、男性より女性のほうが学習者の誤りに不快感を持ち、不自然だと評定している。そして、年齢の差は領域 1・3 の理解度を除くすべての基準についての評定に影響を与えることがわかった。

### (2) 社会的要因の別の分析

領域 2 の誤りにおいて「学歴が高い」「外国人との対話経験がない」「外国人の日本語の誤文を読んだ経験が少ない」ほうが、領域 2 と 3 の誤りにおいては「外国人の日本語の誤文を読んだ経験がない」ほうが、領域 1 と 3 の誤りにおいては「韓国語の学習歴がない」ほうが、学習者の誤りの理解が困難である。また、3 領域の誤りにおいて「学歴が高い」「話せる外国語がある」「外国に住んだ経験がある」、領域 2 においては「韓国語の学習歴がある」ほうが、学習者の誤りに不快感を持つ。そして、3 領域の誤りにおいて「学歴が高い」「韓国語の学習歴がある」「外国人との対話経験がある」「外国人との対話経験が多い」「外国人の日本語の誤文を読んだ経験がある」「話せる外国語がある」「外国に住んだ経験がある」、領域 1 と 3 においては「外国人の日本語の誤文を読んだ経験が多い」評価者のほうが、学習者の誤りをより不自然だと評定していることがわかる。

### (3) 韓国文化の理解度による分析

領域 2・3 の誤りにおいて「韓国に対する関心がない」評価者のほうが、学習者の誤りの理解が困難である。領域 1・3 については「韓国のキムチについての知識がある」、領域 1 については「韓国に対する関心がある」、すべての領域について「韓国についての知識がある」ほうが、学習者の誤りをより不自然だと評定していることがわかる。

以上、第 5～7 章の考察の結果からみると、日本語母語話者の要因は、誤りの原因・領域に関係なく、3 つの基準についての評定に影響を与えるということが言える。そして、性別、年齢の差は理解度の評定に、韓国文化の理解度は不快感についての評定には影響を与えないことがわかった。

一方、日本語母語話者の要因による評価の差が有意であるものは、自然度、不快感、理解度の順で多く、この順で 3 つの基準についての評定に影響を与えるといえる。そして、理解度と不快感についての評定に影響を与える日本語母語話者の要因は完全にくい違っていることがわかった。

### <第 8 章>

本章では、日本語母語話者が誤りを評価する際の、誤りの訂正について考察した。誤りを評価する際、日本語母語話者による文章内の各誤りの訂正は同一ではなく、3 つ以上が多い。それは、学習者の表現意図が理解できないこともあるが、それよりも、文章内の誤りなので、文脈上いろいろな表現が可能であるためであろう。そしてそれは言語表現における日本語母語話者の言語使用の現状を表しているものである。

一方、誤りの原因別にみると、日本語内の問題による誤りのほうが訂正の数が多い。これは、正しいものと誤ったものがほとんど似た表現なので、さまざまな表現を用いたためである。誤りの領域においては、語彙論的な誤りのほうが訂正の数が多い。意味上の誤りのほうが、文法上のシンタクス・意味論的な誤りより、さまざまな表現を用いることが可能なためである。

また、日本語母語話者の持つ要因では、「学歴」「韓国語の学習歴」「外国人との対話経験」などによって訂正の種類別の人数に差が見られた。

そして、誤りの訂正の種類による重要度は、理解度、不快感、自然度の基準においてすべて異なる。また、訂正の種類別の人数と誤りの重要度とは関係がないこともわかった。

### <第 9 章>

本章では、84 個の誤りを 49 種類に分類し、3 つの基準においてどのように評定されるか、また日本語母語話者の性別・年齢別に見た誤りの評価について考察した。

その結果、84 個の誤りはほとんど自然度、不快感、理解度の順で、重視され、厳しく評価された。49 種類に分類し、同種の誤りを分析した結果、すべての基準において、評価の差が見ら

れた。

また、性別・年齢別、誤りの評価について考察した結果、性の差は不快感、年齢の差はすべての基準についての評価に影響を与えるといえる。

具体的には、性の差において男性より女性のほうが、学習社の誤りの理解が困難で、不快感を持ち、不自然だと評価していることがわかる。そして、年齢別に最も厳しく評価された誤りの数は、10代と60歳以上の理解度と不快感で、20代では不快感と自然度で多いが、30～50代はすべての基準で少ないことがわかる。

#### <第10章>

本章では、日本語母語話者の社会的要因別に見た、誤りの評価について考察した。その結果、「学歴の差」「韓国語の学習歴があるかどうか」「外国人との対話経験があるかどうか」「外国人の日本語の誤文を読んだ経験があるかどうか」は理解度に、「職業の種類」「学歴の差」「外国語が話せるかどうか」「外国に住んだ経験があるかどうか」は不快感に、「職業の種類」「韓国語の学習歴があるかどうか」以外のすべての社会的要因は自然度についての評価に影響を与える。そして、韓国語の学習歴があるかどうか」「外国人との対話経験があるかどうかおよびその経験の多少」「外国人の日本語の誤文を読んだ経験があるかどうかおよびその経験の多少」は不快感についての評価にほとんど影響を与えないといえる。

具体的には、「学歴が低い」「外国人との対話経験がない」「外国人の日本語の誤文を読んだ経験がない」評価者のほうが、学習者の誤りの理解が困難である。また、「学歴が高い」「話せる外国語がある」「外国に住んだ経験がある」ほうが、学習者の誤りに不快感を持つ。そして、「学歴が高い」「外国人との対話経験がある」「外国人との対話経験が多い」「外国人の日本語の誤文を読んだ経験がある」「外国人の日本語の誤文を読んだ経験が多い」「話せる外国語がある」「外国に住んだ経験がある」ほうが、学習者の誤りをより不自然だと評価していることがわかった。

#### <第11章>

本章では、韓国文化の理解度による、誤りの評価について考察した。その結果、韓国に対する関心があるかどうかは理解度に、韓国のキムチについての知識及び、韓国についての知識の有無は、自然度についての評価に影響を与える。そして、韓国のキムチについての知識、韓国に対する関心、特に韓国についての知識の有無は、不快感についての評価には影響を与えないといえる。

具体的には、韓国に対する関心がないほうが、学習者の誤りの理解が困難である。韓国のキムチについての知識と韓国についての知識があるほうが、学習者の誤りをより不自然だと評価していることがわかった。



## ＜第12章＞

本章では、本研究の成果を要約し、その結果の考察、及び日本語教育への応用について述べた。そして、今後の研究課題については、誤りの評価における主要な要素である日本語学習者の誤り、評価の基準、評価者を中心に述べた。

本研究の結果は、外国語として日本語を教えている教師にとって重要な教授上の示唆を含んでいる。それは次のとおりである。第1に、日本語母語話者の各要因及び誤りの原因・領域別において、韓国人日本語学習者の誤りが自然度の基準で最も厳しく評価されていることである。つまり、理解はでき、やや不快感を持つが、自然な日本語としては認めがたいということである。第2に、いずれの基準においても文法上の誤りより意味上の誤りのほうが、学習者の母語（韓国語）の干渉によせない誤りより母語の干渉による誤りのほうが厳しく評価されていることがわかった。このことから、意味的な面（語彙の誤り）と、韓国語の干渉による誤りを優先的に指導（訂正）することが必要であると言える。第3に、日本語母語話者間でも誤りの訂正は同一ではないが、これは日本語母語話者の（特に、学習の程度、学習者の母語（韓国語）の学習歴と外国人との対話経験の有無などの要因による）言語使用の現状を表している。日本語教師（特に、韓国人日本語教師）は問題である誤りに関する母語話者の言語使用の現状を認識することが必要であろう。第4に、日本語母語話者（読み手）の多様な要因によって、すべて（特に不快感と自然度）の基準で、誤りの評価に差が出てくることである。したがって、コミュニケーションを重視する授業で日本語教師は学習目標及び目的（そして、予想されるコミュニケーションの相手）によって、誤りの重要度を判定しそれに則した評価（訂正）をすることが要求される。

今後の研究課題は次のとおりである。第1に、本研究で用いられた誤りの材料は文章であったが、次には会話での語彙・文法の誤りで、そして音声上の誤りも含めて、音声を聞かせて評価させるタイプの研究が必要である。第2に、本研究では3つの評価基準の間にはそれぞれかなりの相関があり、また、自然度・不快感・理解度の順で厳しく評価されていることがわかった。しかしこの結果は、文章を用いての結果であって、それを上に述べた会話や音声についての研究にも一般化できるかどうかははっきりしていない。こうした研究では、3つの基準の関係が、本研究と違ったものになるかもしれないし、この基準そのものが別のものになるかもしれないのである。第3に、本研究での誤りの評価は、コミュニケーションの受け手を中心にしたものであったが、今後は送り手に目を向けた研究が必要になるといえる。同じ誤りであっても、それがどんな送り手によって犯されたかで、不快感と自然度についての評定に違った影響が出てくると考えられる。たとえば、送り手の社会的役割（留学生、ビジネスマン、労働者など）によって、日本語母語話者の社会的受容度には差があると予想される。

# 論文審査結果の要旨

本論文は、全体が12章で構成されている。

第1章 序論では、学習目標が完全な正確さであれば、すべての誤用は同一の重みをもつが、コミュニケーションな成功が学習目標であれば、誤用の種類によって受け手に与える誤用の重みに差が出ると論じ、この研究では、学習目標が後者であることを前提とすると宣言する。

その前提に立って日本語教育研究の現状をみると、誤用研究の中で誤用の重要度 (error gravity) に関する研究は、不十分であり、なされるべくして放置されている研究分野である。また、わずかに存在する研究も小人数の大学生と日本語教師を対象としたものに限られ、学習者が将来遭遇する様々な属性の日本語母語話者を対象とした研究はないと論じた。

第2章 誤りの評価に関する研究の現状と本研究の目的では、誤用に関する先行研究について、誤用の領域 (語彙、形態論、文法等)、誤用の評価基準 (理解度、不快感、自然度)、評価者 (学習者の目標言語話者) の要因に関するものを中心に概観した。また、日本語教育における誤用分析と誤用評価の関係についても述べ、本研究の位置づけをした後、誤用の相対的重要度を評価者の属性との関係で捉えることを目的とすることを述べている。

第3章 韓国人日本語学習者の誤りについての調査では、本研究で評価の対象とする、韓国人日本語学習者の翻訳上の誤用の領域、原因、頻度等を学習レベルとの関連で考察している。学習者の誤用の領域は、1. 語彙論的誤用、2. 形態論的誤用、3. 統語・意味論的誤用に分類できる。原因は、1. 韓国語からの干渉による誤用と2. 韓国語からの干渉以外の誤用に二分される。学習レベルとの関連から誤用の頻度について概観すると、確かに大学2年生よりは3年生の、3年生よりは4年生の誤用の頻度は少なくなるが、領域別にみても、原因別に見ても、大差は見られない。これは、韓国人日本語教師が誤用分析について真剣に考えずに教えている結果ではないかと推測している。

第4章 本研究の方法では、可能な限り異なる属性の日本語話者691名を評価者とし、評価対象とした文章は、韓国人日本語学習者274名が韓国語を日本語に翻訳した際に最も頻度の高かった誤用84個を含むものとした。内容は、韓国のキムチに関するもので、長さは、2,051字76文からなるものだった。依頼は、本研究者が直接、あるいは郵送で行った。誤用の評価は、理解度、不快感、自然度の3つの観点から、5段階尺度で評定し、誤用の訂正も依頼したことが述べてある。

第5章 誤りの全体的評価では、84個の誤用に対する評価では、①ほとんどの場合評定値を4つ以上用いており、誤用の重要度には差がある。また、84個の全ての誤用に対する評価は、自然度、不快感、理解度の順で厳しく、日本語母語話者は、かなり不自然、やや不快、やや理

解が困難であると感じている。評定の3つの基準間の相関はいずれも高く、理解度の低い誤用ほど不快に、不快度の高い誤用ほど不自然に、理解度の低い誤用ほど不自然に感じられるという関係にあること等が確認された。②誤用の原因別では、韓国語の干渉による誤用が重大だと評価された。干渉による誤用は、日本人には見慣れない構造をしていることがその原因であると推測される。領域別では、いずれの基準からも語彙・形態論的誤用が統語・意味論的誤用よりも重大であると評価された。③誤用と日本語母語話者の属性の関係をみると、韓国・韓国語への関心がない者は、理解に困難を感じ、女性、高学歴者、外国人接触度の高い者が不快に感じ、女性、高学歴者、外国人接触度の高い者、韓国・韓国語への関心が高い者が不自然と感じるという結果が示された。

第6章 誤りの原因別の評価、第7章 誤りの領域別の評価、第8章 誤りの訂正の分析、第9章 性別・年齢別による誤りの評価－誤りの49種類の分析－、第10章 社会的要因別の誤りの評価、第11章 韓国文化の理解度による誤りの評価の各章では、第5章で得られた大まかな知見をより詳細に分析したもので、いずれも第5章の結果を支持する結果となったとする。

第12章 結論では、本研究の結果を要約し、その結果の考察、日本語教育への応用、および研究の今後の展開について述べている。日本語教育への応用についての5つの提言は、第1に、3つの評価基準は、高い相関関係を示し、不自然な日本語は、理解が困難で、不快感を与えるという関係が明らかになった。つまり、自然な日本語を教育することが最も重要な課題であると提言した。第2に、語彙・形態論上の誤用が統語・意味論上の誤用よりも厳しい評価を受けること、また、干渉による誤用がそれ以外の誤用よりも厳しく評価されることが明らかになった。このことから一時下火になった対照研究、特に語彙レベルの対照研究を推進し、日本語教師にその情報を提供する必要性が高いと提言した。第3に、日本人の訂正が一枚岩ではなく、数種類にのぼる。その原因の1つは、誤用の解釈に複数のものがあることである。学習者の誤用を訂正するとき学習者に真意を確かめることが重要であると提言した。第4に、日本語母語話者の要因が誤用の評価に影響を与えることが明らかになったことから、学習者が将来どのような属性の日本人とコミュニケーションする機会が主となるかを考慮してシラバスを決定する必要があることを提言した。第5に、学習期間と誤用の頻度について、期間の長さが誤用の頻度を減少させる傾向にないことが明らかになった。提言の第2で述べたように、干渉による誤り、しかも語彙の誤りを重点的に訂正する努力が必要であると提言した。

目標言語母語話者が学習者の誤用をどう受け止めるかについての大規模な調査研究は、日本語教育の分野に限らず、これまでほぼ皆無の状態であった。外国人教師はもちろん、日本人日本語教師であっても、どの誤用に対する指導を優先させるべきかについては、経験的判断以外に依るべき根拠を持たなかった。提出者が84個の誤用について691名の評価者を動員して行っ

た大規模かつ画期的本調査研究は、今後の日本語指導、誤用研究、評価研究に寄与するところ  
大である。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと  
認められる。